

一、旅の始まり

朝鮮半島の歴史と文化が我が国にもたらした影響は、測り知れない。とりわけ古代日本と関わりの深い場所などは、一度は訪ね歩きたいものだと思っていた。私は、日本であれ、外国であれ、古代の社会・文化・文学をより深く理解するために、出来る限りその舞台となった場所に立ってみたいと思う。これは、考古学に熱中した高校・大学時代に身に付いた習性である。今春、韓国語を学んでいる友人の同行を得て、ようやく望みが叶い、百済最後の都として知られる扶余^{フヨ}と、新羅の都・慶州^{キョンジュ}を訪れることができた。以下は、その遺跡探訪の旅の報告である。

三月三十一日(木) 午後三成田を発ち、十六時頃に仁川着。空港の鉄道案内所でコリアレールパス(日本から予約する)を受け取り、ソウルから大田^{テジョン}へのKTXの切符をも手に入れた。最近完成したばかりという空港線の電車に乗ってソウルへ向かう。地上部分では、窓の外の大団地の風景に、日本の団地とよく似ていながらどこなく違うものを感じる。やはり「外国」である。同行の友人・Yは教育関係の研究のために何度か韓国に訪れていて、国内事情にもだいぶ通じている。

韓国では首都への人口集中が激しいが、その要因の一つとして、子どもの有名大学進学を願って少しでも有利になるようにと親子で移り住むことがある、古い団地では各戸内が狭い、ソウル市内でもつい最近まで下水道設備が不十分だったから地方は推して知るべし、等々の話を聞く。そのうちに電車は地下に入った。空港で入手したソウル地図と地下鉄路線図が、空港線と地下鉄の路線関係に対応しておらず、車内放送や駅名の漢字表記を頼りに位置を想像する。一時間余でソウル駅に到着。KTXの発車時間(十八時三十分)がもう迫っている、あたふたと移動し、韓国ご自慢の高速鉄道に乗り込んだ。

すっかり夜になって大田に着き、地下鉄に乗り換えて儒城温泉^{ユンオンチョン}へ。初日に扶余までは無理なので、それなら高名な温泉地へ行ってみよう、という選択だ。宿泊先はホテルスパピア。地下鉄駅からは徒歩でホテルへ向かった。韓国の温泉はどこも日本人のイメージする温泉とは異なり、風呂も健康ランドのようなものだという事前知識は得ていたが、本当にその通りである。儒城の街も、いわゆる市街地よりは歓楽的な感じがあるものの、我々の思う温泉地らしい雰囲気は皆無である。この日は、到着が遅くなったので、ホテルのすぐ傍

の食堂で夕食をとると、温泉入浴の時間がなくなった。別棟の温泉は夜九時までしか開いていないからである。

二、扶余を訪ねて

翌日（四月一日）は朝のうちに温泉に入り、ホテルの朝食を食べて、タクシーで市外バスのターミナルへ。タクシーの運転手が、韓国は日本に比べてタクシー料金が安い、としゃべりに言っていた。私たちが扶余に行くと言ったので、そのままたクシーで扶余観光してくれたら、と期待したのである。確かに、後から考えると、タクシーで儒城から扶余に直行したほうが良かったかもしれない。勿論バス料金よりは高いが、「利便性」と「時間」を思うと思えば、決して高くはないだろう。私達は、儒城のバスターミナルを九時二十分に出て、公州着が十時三十分。ここで扶余行きのバスを待つこと一時間余、公州を十一時四十分に出たバスは、扶余到着が十二時四十分。つまり儒城から三時間二十分もかかったのだ。しかも、扶余発二時五十五分のバスで大田へ戻らなければ、この日の宿泊地・大邱での予定に間に合わない。せつかくの扶余滞在時間が二時間くらいになってしまった。それでも天候にめぐまれ、心躍る時間を過ごすことができた。

現在の扶余はおだやかな田舎まちである。中心部に「聖王」の大きな石像が立つ。この王は、日本では「聖明王」の名で知られる。百濟は、もとはソウル（当時は漢山）に都城を置いたが、北の高句麗によって追われ、公州（熊津）に遷った。

済滅亡（六六〇年）に際して、この岸壁から宮女たちが身を投げたといわれ、今はその場所に阜蘭寺という鎮魂の寺がある。扶蘇山も阜蘭寺も、時間の余裕があれば気軽なハイキングで回れるのだが、今回は諦めざるを得なかった。そもそも事前学習が不十分で、隣接する公州に立ち寄る計画を立てられなかったくらいだから、次回のお楽しみに取っておくことにする。白馬江と扶蘇山の景色は、ちよびり私の感傷を掻き立てたが、川の水は濁って茶色である。昔からこういう川なのか、それとも扶余はいま観光地として整備を急いでいるように（郊外にテーマパーク建設中とか）、観光船の出る少し南でも工事をしていたから、影響しているのだろうか。

国立扶余博物館は時計とにらめっこでの見学になったが、美しい小ぶりの仏像に日本の古い仏像に通じるものが見られるなど、やはり行った甲斐があった。小さくともミュージアムショップコーナーがあり、仏像の図録を買うこともできた。博物館の人は柔和で親切で、入場から退出まで、尊大な感じがする中国の博物館とは大違いである（あくまでも私の印象だが）。私たちが博物館から歩いて定林寺跡を見学する間は、荷物を預かってくれたばかりか、戻ってタクシーに乗る時に、男性係員がタクシーまで荷物を運んでくれた。

定林寺は、博物館から徒歩十分程度のところにある。百濟の時代に創建された寺で、前世紀の半ばに発掘された。石で造られた素朴だが美しい五層の塔があり、国宝になっている。

それ以前から日本（倭）との親交に熱心だったようだが、聖王の父・武寧王の代には、倭に五経博士をおくり始めた。中国と地続きで学問的に進んでいる利を生かし、海を隔てた倭に学者を送りこんで倭国の発展を助けるとともに、強い紐帯をつくらうとしたわけだ。聖王の代には、高句麗の圧迫が再び強まったため、西暦五三八年、公州から錦江（白馬江）を下ったこの扶余（泗沘）に都を遷した。五五〇年には、百濟は高句麗との戦争に突入した。一時は優勢で、五五一年に漢山城を奪回するも、その翌年（五五二年）には東の新羅に漢山城を奪われたという。同じ年に、聖王は倭に「釈迦金銅仏」と「経論」とをおくり、そのわずか二年後（五五四年）に、新羅との戦いの中で命を落とした。こんなにも目まぐるしい半島情勢の中で、仏教は日本にもたらされたのだ。昔、高校の日本史の授業では、当然ながらこうした状況までは教わらなかった。ただ、「欽明天皇の時に百濟から仏像が伝来した」「天皇が『み顔きらきらし』と言った」という程度だ。この旅の前に本（参考文献は末尾）を読んで当時の半島の情勢を漸く理解したが、今読み返してみても、深い感慨を覚える。

扶余では、聖王の石像を中心に、ほとんど徒歩圏内に主要な観光ポイントがある。私たちは時間がなかったもので、タクシーをも使いながら、白馬江、国立扶余博物館、定林寺跡を巡った。白馬江では二十分間ほど遊覧船に乗り、百濟最後の王宮があったという扶蘇山を川から望み、岸壁を眺めた。百

案内板をはじめ、遺跡全体がきれいに整備されていて気持ちのよい場所だ。整備はまだ完成の形ではないらしいが、塔の南側手前の蓮池など、往時を偲ぶことができる。私は池から、塔とその奥の講堂とおぼしき復元建築物を見て、大阪の四天王寺を思い出した。伽藍配置が同じだ。青空を背景に石塔を写真に収めると、わずかでも百濟の仏教文化に触れることができたという満足感が湧いた。

再びバスに乗って大田に戻る。今度は大田西部バスターミナルへの直行バスで、ターミナルからはタクシーで大田駅へ向かう。大田発十七時十一分のKTXで東大邱へ。東大邱着十七時五十八分。大邱は中心部に漢方薬剤の流通拠点を持つ大都市で、この夏、世界陸上が開催された（この時点での私たちはそのことを知らなかったが）。KTXは市の東の新興住宅地側に発着する。四百年も前から栄える中心部に高速鉄道を通すのは難しいから郊外寄りに、というのほもつともである。地下鉄一号線で大邱中心部と結ばれているが、この時は事情があつて、タクシーで中央路にあるホテルに急いだ。Yの友人が大邱に里帰りしているのので、食事を共にする約束があり、ホテルで待ち合わせていたのだ。このホテル（ノボテル大邱）は私の買ったガイドブックには掲載されておらず、ネットで見つけ、市の中心部で地下鉄に便利という立地で選んだ。Yの友人・ソンの話では、大邱で最も新しくグ

レードの高いホテルという。確かに、広いガラス張りで分離

されたトイレとシャワールームなど、ゆったりした快適な部屋だった。

その夜は、ソンの案内で参鶏湯^{サンゲツタン}の店に行った。地元で愛されている老舗と言うだけあって、雰囲気も良くて賑わっている。ソンさんは大邱の中学校の教員で、東京学芸大学に留学した可愛い女性である。参鶏湯は美味で、これからの旅に向けて力がつく感じだ。食事の後は、ソンさんと一緒に夜の散策。「薬令市」と呼ばれる薬の専門店街（夜なので店はほとんど閉まっているが）や、文学者の住んだ家などの保存建造物、カトリック教会周辺などに案内された。坂の上の教会など、ライドアップされた建物がノスタルジックで美しく、歩き疲れて入った洒落たカフェでのティータイムも心に残る。またゆっくり歩いてみたい街である。

三、伽耶山海印寺の体験

四月二日は、朝一番にホテルから地下街を通って地下鉄に乗り、まず東大邱駅で、釜山へのKTXの指定席券を確保。その後、また地下鉄で中心部に戻り、西部市外バスターミナルへ移動。地下鉄「聖堂跡」駅で下車、階段を上を見ると、そこがバスターミナルである。九時四十分発のバスに乗って伽耶山海印寺^{カヤサンヘインサ}を目指す。世界遺産「八萬大蔵経」を持つ高名な寺は、今回の歴史探訪には外せない。

バスに乗り込むと、最前列に座る恰幅の良い老齢の僧侶が目に入った。きつと海印寺のお坊さんだろう、と親しみが湧

く。老師は、灰色の作務衣に同色の綿入れ上着をまとい、木製の珠の大きい数珠を手でまさぐりつつ、小声でしきりに経を唱えている。時々「アーアー」というような大きな声も交じる。私たちは老師の斜め後ろに席を取った。バスは郊外へ出て、のんびりした田舎らしい集落を経て、山を上り始める。途中、古墳とおぼしきものが幾つか見え、博物館と駐車場のある場所を通過した。後日、地図等を見て確かめたところ、これは百済と同時期に存した大伽耶国の遺跡として、最近スボットを浴びている古墳群であった。かつての考古学少女としては見るべき所であったが、ガイドブックに紹介がなく、私たちの乗ったバスも停車する気配はない。物好きでなければ行かない場所、ということでは観光客向けの紹介はまだ少ないのだろう。個人で車を確保しなければ見学は難しいのかも知れない。しかし、まことに惜しいことをした。次回は是非ともゆっくり見なければならぬまい。

海印寺に近づいた所でバスに乗り込んできた係員が、乗客から入山料を徴収してまわる。その時の会話で私たちの存在に気付いた斜め前の老師が、「日本人ですか」ときれいな日本語で声を掛けてきた。そうだと答えると、では私が案内しましょう、と言う。私たちは多少遠慮をしつつも、いい案内人に巡り会えたことを喜ぶ。客の大半は終点の手前の「海印寺入り口」という停留所で下車したが、老師は私たちに、ここではない、と合図する。終点到着は十一時頃。バスを降り

ると、老師は土産物店前に駐車した乗用車に向かった。土産物店の主らしき人が老師に丁寧な挨拶をする。老師は一台の車を示し、乗るように言う。バスで通路を挟んだ席に座っていた中年の小柄な女性も一緒である。坂のきつい車道を運転する老師は、なかなか「元氣」なもので、ちよつと驚かされた。入口から歩けば二十分あまりかけて上る山道を、私たちは数分で、楽々と海印寺内まで着いてしまった。

車を降りたのは、僧坊前である。老師は、礼を述べて立ち去ろうとした私たちを「観光は昼食の後に」と熱心に引き留め、自室へ招き入れてくれた。なんとという幸運！僧坊に入ると、そうそう経験出来ることではない。簡素だがオンドル暖房の効いた、三〇四畳程度の部屋である。もちろん調度品は多くはない。本当に必要な物だけの暮らしが窺われる。

「自分はもう九十二歳で楽隠居の身であり、月に一度大邱の病院へ通うのだ」とか、「日本の占領時代に子どもだったから日本語が話せる」などと話してくれて、小さなテーブルにあった餅を、「海印寺の餅は旨い」と勧めた。数種類の豆が入った餅である。車に同乗してきた女性は隣室の住人で、老師の指示で私たちの分まで昼ご飯を準備し、彼女の部屋で四人で食事をした。ラーメンとご飯と漬物類というメニュー。コリコリした海鼠の和え物も勧められた。この食事忘れ難い。彼女の部屋では、経典類がぎっしり並んだ書棚が目にく。老師の蔵書という。老師の身の回りの世話をしている人

のようだ。

食事がすむと、老師が寺を案内してくれた。その達者な歩みも、また驚きである。身長が高く、ぴんと背筋が伸びた後ろ姿を見せながら、どんどん進み、石段にくと一段飛ばしにヒョイヒョイと上り下りする。私たちは付いて行くのに必死である。山寺の石段を毎日上り下りして七、八十年も生活すると、こんなに健脚にもなるのだろう。初めに土産物コーナーの奥のシアター室で、海印寺紹介の映像を見る。ここを訪れる日本人団体客も見るとのよう。分かり易くて良い。それから主だった堂宇を回る。途中、お勤めの後とおぼしき僧侶の一人に出会ったが、先頭の立派な袈裟を着た僧侶以下、全員が老師に向かって恭しく頭を下げた。やはり相当な高僧なのだろう。寺の最も高い場所に、「八萬大蔵経閣」がある。

お経の版木を収める収蔵庫である。「八萬大蔵経」は、仏教の加護によって外敵の脅威から国を護りたいと願った高麗王朝のものである。おそろしく大量の版木は、一二三六年から十六年かけて完成し、それからおよそ百五十年後にこの寺に収蔵されたという。ここでは、観光通路からはずれた所からも内部を覗かせてもらうことができた。版木を保存するために通風などが工夫された二棟の収蔵庫は、数百年前の建物らしい。願わくはもう少しじっくり見て回りたいところだが、足の達者な老師としてはふつうなのだから、仕方がない。この後で、内部が近代的に改築された大きな食堂^{じきどう}に入れてくれ

た時に、自分の席と食器セットを指さして教えてくれた。どうやら上から三番目くらいの待遇らしい。納得、である。

寺の修復のために募金呼びかけるテントで、私たちは老師の勧めで瓦に名を書いて寄進をした。ここで一緒に記念写真撮らせてもらい、もう少し寺を見たいからと、丁重に礼を述べて老師とは別れた。中央部の広い境内には、三層の石塔があり、これは八〇二年の寺創建時のものという。やつとゆつくり写真がとれる。韓国の寺の境内には、どこでも色とりどりの丸い提灯を多数提げた一郭があったが、この寺では、ほかにロープで通路を作りながら区切った場所があり、その通路を参拝者がぐるぐる歩いていて、ちようどお百度踏みをおぼせるお参りのしかたである。ロープには、鮮やかな蓮の花を象った紙の下げ物が付けられていて、実に綺麗だ。寺の境内に、草花の類ではなくて、提灯や造花の華やかな色彩があるのは、日本の寺ではあまりないと思う。日本の寺で造花の鮮やかさを見るのは、特定の儀式や祭りの時くらいではないか。仏像の前にも、生花が飾られていることが多い。しかし、平安時代の物語や私家集を読んでいると、そこに出てくる法華八講とか涅槃講などの法会を想像すると、その場には造花の鮮やかな彩りがあつたと思われる。それは例えばこんな具合だったのだろうか、とぼんやり考えた。Yが、お坊さまの後ろについて歩いてる時、昔、私たちがK先生の後を付いて歩いたのと同じだったよね、と言った。その通りである。

オバサン二人組だが、夜景は誰をも等しくロマンチックな気分にする。タワーの下の方の桜が五分咲きで、連日の晴天続きにも拘わらず、花に出会うことの無かつた私たちを喜ばせた。タワーを下りて、歩いてロッテデパートに行き、夕食を摂る。前回Yが来た頃はまだデパートは出来ていなかったそうだ。ロッテのレストラン街も客が多い。大邸といふ釜山といい、韓国は商業施設がどこも大にぎわいだ。そこから更に屋台を見ながら歩いて行き、おでんなども少しは味わって、国際市場周辺に着く。さすがに歩き疲れてホテルに戻った。

四、釜山から慶州へ

四月三日。釜山は曇りで、小雨も交じる寒い日であつた。朝はチャガルチ市場を歩き、市場中央あたりで朝食を摂る。焼き魚というより揚げ魚の定食、二人で一万一千ウォン也。格安というほどではないが、付け合わせの海藻も新鮮だし、雰囲気をも味わったと思えば、まあ程々である。次にエステに行き、昼食はカルビ焼き肉と、韓国旅行の王道を体験する。午後、地下鉄一号線に乗って老圃洞まで行き、韓国には珍しいコインロッカーに荷物を入れて、梵魚寺観光へ。釜山郊外には心ひかれる場所が複数あつた（通度寺など）が、どれも離れているため、その日のうちに二つ以上を訪ねた上で慶州へ移動するというのは困難である。それで観光の王道プラス梵魚寺という選択だ。

地元民の信仰が厚いという梵魚寺は、韓国禪宗の総本山で、

K先生も背が高く背筋が真っ直ぐな後ろ姿で、歩くのがとても速くて、大学の研修旅行でも、その十六年後の研究会の旅行でも、私たちは先生の背中を見ながら必死に歩き続けたものだ。何やら運命的である。

海印寺下のバス停を十四時四十五分に出て、十六時に大邸バスターミナル到着。地下鉄を使ってホテルに預けた荷物を取りに戻る。地下商店街が閉まつていた朝とは大違いで、通路には人が溢れ、ホテルまでは往きの倍の時間がかかった。荷物を受け取った後は、再び地下道を歩く余裕が無く、タクシーを飛ばして東大邸駅へ向かつた。KTXは東大邸発十七時〇七分、釜山着は同五十五分。ここでも地下鉄に乗り換えてホテルに向かう。チャガルチ市場に近いフェニックスホテルは、地下道出口にも近いのだが、行ってみるとどこから出るのかがわかりにくくて、エスカレーターのある出口まで辿り着けないまま、トランクを持って階段を上ってしまった。（韓国は、首都をはじめ、大邸でも釜山でも地下商店街が発達しているが、エスカレーターがほとんどない）。ホテルは建物も設備も古いが、観光の足場としては最適で、日本人客が多いのも頷ける。

荷物を置いて、まずは釜山タワーに上り、夜景を眺めた。眼下に広がる街並みと港。これが半島の南端部、日本に一番近い場所なのだと思うと、感慨が深い。夜はデートスポットらしく、客はほとんどがカップルである。私たちは場違いな

新羅時代に義湘大師によつて創建されたと伝えられる。私は「義湘」の名に、かつて京都国立博物館あたりで見た絵巻物を感じ起こした。女性が身を投げたり、龍の上に船が乗つたような図柄が印象に残っている。その絵巻の主人公の法師が開山した寺なのだ。帰国して調べると「華嚴宗祖師絵伝（華嚴縁起）」（高山寺蔵）なる絵巻であつた。かつての梵魚寺の七堂伽藍は、ほとんど文祿の役で焼失し、十七世紀に一部が再建されたのだという。海印寺と比べると市街からそれほど遠くはないのに、景色がよく、山寺らしい風情もある。雄大な一柱門などの建物も美しく、訪ねた甲斐があつた。

寺からバスで最寄りの地下鉄・梵魚寺駅へ戻る。荷物を預けた老圃洞駅の一駅手前。老圃洞では、地下鉄駅と市外・高速バスターミナルが隣接している。十六時二十分の慶州行き市外バスに乗り込み、十七時十五分頃、慶州の市外バスターミナル到着。タクシーを拾って、普門観光団地のホテルに向かう。慶州では、良いホテルは郊外の普門湖（人工湖）のほとりに集中している。観光に便利な市中のツーリストホテルを撰ぶか悩んだが、やはり「観光団地」なる場所に行つてみたかつた。タクシーなら慶州市内からたいして遠くない。普門湖畔は、なるほどなかなかのリゾート地だと納得した。桜が咲いたら、さぞ美しいだろう。残念ながら、釜山から山並みを越した北側にある慶州は、やはり気温が下がるらしく、桜はまだ蕾である。宿泊先は、教育文化会館という所。日本

で言えば教職員共済組合直営ホテルのようなものなのだろう。湖畔ではないが、温泉施設もあり、なかなか設備の整ったリゾートホテルだ。フロントの対応もフレンドリーである。夕食はホテルから見えた小さな商店街のレストランでチヂミなどを食べる。近くに塔の形を抜き取ったような面白い建造物が見えた。ここには新羅時代の宮殿などを模したテーマパークもあるが、経営状況はどうなのだろう。慶州の本物の史跡群を見てしまったら、大人は心が動くまい。

五、古都・慶州めぐり

四月四日。すばらしい晴天。昨夜のうちにフロントマンと相談し、タクシーを一日貸し切り（十万ウォン）、私が選択した史跡をめぐることにする。親切なフロントマンは、初め熱心に定期観光バスを勧めた。そのほうが経済的だからである。しかし、私の希望はバスのコースで言えば複数のコースにまたがる内容なのである。Yが、彼女の韓国語のボキャブライに英語を交ぜながら、お金の問題より希望の場所をまわることが重要なのだ、と懸命に説明してくれて、タクシーの手配にこぎつけた。朝食を済ませてフロントに下りると、前夜のフロントマンが待っていてすぐに案内してくれた。午前九時、ホテルを出発。

まずは、仏国寺の傍を通って、石窟庵^{ソクグラム}へ。車は吐含山のつづら折りの山道を上って行く。入り口から少し歩き、見晴らしの良い山懷に石窟庵があった。四角い前室の奥、ドーム型

主室には、丈六の美しい釈迦如来が鎮座する。八世紀半ばに、統一新羅の宰相・金大城が現世の父母のために仏国寺建立を發願したとき、付属の石窟として前世の父母のために作らせたいものという。今は、保護・管理のために主室との間にガラスの壁を設けているため、ガラス越しにしか如来像を拝めず、如来の背後のレリーフなどもほとんど見えないのが残念だ。ガラス越しに見る中尊寺金色堂と同類である。ただ、信者なのか、数人がガラス室の中で拝礼していたから、誰も入れないのではないようだ。日本人団体客と一緒にだったので、自然、そのガイドの解説を聞くかたちになった。忘れられていた石窟庵が「発見」されたのは所謂「日帝時代」であるため、ガイドの説明も、案内解説板も、「日本が無知な復元をして、手前の仏像群の並べ方を誤ったほか、湿度などが自然に調節されるように新羅の技術で作られていたドームをコンクリートで覆ってしまったために仏像に微がいつてしまった。」という趣旨である。石窟庵は十七世紀までは昔日の姿を保っていたらしいが、その後荒廃し、二十世紀初頭に山を歩いていたら土地の人に「発見」された時には、ドームが半ば崩落して如来像がまる見えの状態であったという。「発見」からまもなく日本人による最初の復元工事が行われた。コンクリートのもたらした害は事実なのだろうが、一九六一年以後、数度にわたる調査・復元が行われて今日に至っている。

続いて仏国寺へ。日本（倭）よりも四半世紀早く仏教を取

り入れた新羅が、七世紀後半に半島の統一を果たした後、都の慶州は仏教を中心とする文化都市として非常に繁栄した。そのころの寺院群で最も知名度が高く、世界文化遺産に登録されたのが仏国寺だ。観光客も多い。参道を進んで行くと、前面に美しい石橋を持つ紫霞門と安養門が現れる。正面からは、石橋というよりは高い石段に見えるが、紫霞門の石橋は、白雲・青雲の二つから、安養門のそれは蓮華・七宝の二つから成る。これらの石橋は一部の石を除いて創建時のものと言う。建物は、発掘調査を踏まえて一九七四年に復元が完成したものだそうだが、全体の装飾が陽光に照らされて、その美しさに息をのむ。参拝順路に従って行くと、回廊の一部から紫雲門の奥に入る。大雄殿の手前に釈迦塔と多宝塔という二つの石塔があるが、この二つも創建時代のものらしい。奥の大雄殿の釈迦三尊は柔和で金色に輝いていた。仏窟庵の仏もこの本尊も、日本の藤原時代の仏像によく似通っている。大雄殿の奥にもまだ甍が見えたが、私たちが行った時は、これら奥の建造物のほうは修復中の様子で、見物することは出来なかった。

次は武烈王陵へ。新羅による統一に功のあった王である。六六〇年に五十八歳で即位し、翌年には亡くなるも、子の金法敏が文武王となつて後を継ぎ、文武王時代に統一が完成した。王族の一員として金春秋と呼ばれていた頃の六四七年には、日本にもやつて来た。『日本書記』孝徳紀に「春秋は美姿顔

くして、善みて談笑^{はなをたのしみ}す」とある。日本は「大化改新」の二年後である。日本に来る前年には敵対する高句麗に行き、日本訪問の翌年には新羅がかねてから親和する唐に赴いたというから、実にエネルギーな外交官だったらしい。陵墓は美しい円墳で、その手前に墓碑を支えていた亀趺^{かまど}がある。私の読んだ本には大きな亀が野原にいるような感じの写真が掲載されていたが、今は屋根付きの木枠で囲まれている。恥ずかしながら、私は亀趺というものを、数年前に周防の国府跡を訪ねた折に初めて認識した。それまで全く見なかった訳ではないかもしれないが、こういうものがあるんだ、とひどく感動した覚えがある。この亀趺は大きいだけでなく写実的にも勝れていて、亀趺の親玉と呼びたい逸品である。

次に武烈王と手を携えて戦った將軍・金庾信の墓に行く。高台に位置していて、都を見下ろし、守護するように墓が作られたことを想像させる。ただし、最近の研究では、これが金庾信の墓であることを否定する論もあるらしい。日本の天皇陵比定のように、本当のところはもっと研究が必要なのだろう。円墳の基壇石に、十二支のレリーフが刻まれている。ぐるっと見て回ったが、明るい陽光も災いして、どんな形が刻まれているのか、よくわからないものが多かった。驚くのは、武烈王陵よりも、参道などが立派に作られていることで、高台にあるからだけでなく、金庾信は人気があるのだと感じた。新羅には、「花郎」と呼ばれる、愛国的な貴族の子弟た

ちの精神と肉体の修養の場があったという。金庾信は、南の伽羅にあった国の王族の末裔というが、花郎出身らしい。現在、「花郎教育院」なるリーダー育成施設がこの慶州にあり、大きな看板が目を引く。

次は鮑石亭跡。これは南山に向かう道筋にある離宮跡だ。曲水宴の水路がある庭の遺跡で、石で作られた水路が、上から見るとアワビの形に似ていることからついた名という。確かに、水路は、中央にぐるりと円形に流れるところがあり、そこに流れ込んで、また出て行くようになっていいる。現在水路のある大木の林と、花が植えられた所とがあるが、往時の庭は今ひとつ想像しにくい感じがする。

ここで昼時なので、「瑤石宮」という宮廷料理の店へ行く。Yが希望し、私も異論はなかった。運転手は初め「高い」と言って心配したが、私たちの意思が固いと知って、しぶしぶ予約の電話を入れ、店につれて行ってくれた。かつての両班の屋敷を改装した店で、チマチョゴリ姿の女性がもてなしてくれる。端のほうの小さい部屋に通された。こぢんまりして落ち着くオンドル部屋で、石灯籠のある庭が見える。食事は、言うまでもなく上品で美味。魚、肉、数々の野菜。盛りつけも美しく、日本の会席料理コースのような感じである。全十品くらい出たと思うが、さすがに途中から食べきれなくなり、残さざるを得なかった。印象に残ったのは、ドングリを粉にしたもので作るという黒い棒状の食品。生麩をもっと硬くし

丸く独立した円墳もあれば、ラクダの背のような二つ繋がる墳丘もあった。総計二十三基という。高い墳丘から滑る者もいた。お天気もよし、高い墳丘に立ち、下まで滑ってみたい気持ちも少しわかる。

次は、瞻星台、鷄林、石氷庫をまわり歩く。これらは大きな公園として整備されている中にある。歩道が整備され、花壇も作られて、春の花を植える人々が働いていた。瞻星台は、高さが九メートル余り、下が広く上がすばまった茶色い円筒状である。七世紀初めのもので、東洋で現存する最古の天文台という。天文台というよりも、可愛らしい倉庫のような概観で、メルヘンチックな印象を受ける。鷄林は、新羅王家・慶州金氏の始祖伝承の地。始祖の誕生の地とか、鷄の声で目覚めた四代・解脫王が金の櫃から子どもを得た地だとか、それらの伝承を知らなければ、ただの居心地の良い林である。鷄林のところから坂道を上って丘に出る。丘は松の大き木と石とによって、山城の土塁状を成している。丘全体が半月城と呼ばれるかつての王宮跡である。この一郭に石氷庫がある。これは花崗岩で作られた石室で、冷蔵庫として使われた場所。日本で言うところの氷室にあたる。現在残っているのは李朝時代に再建されたものである。

次に雁鴨池に行く。ここは文武王が半島の統一の記念に造営した離宮の跡で、今見ているものは本来の規模の半分以下というが、大きな池がメインである。この池の発掘調査では

たような食感で、おもしろくて美味しい。料金は一人あたり三万ウォン（プラス税三千ウォン）だったが、行く価値はある所だと思う。食後は、建物を外から見学できるといので、反対側にまわって見せてもらった。料理の皿を手にしたお姉さんが、裳の裾を翻しながら庭を横切ったりする。少しだけタイムスリップしたような気分である。その後で、店に隣接する別の屋敷（店の屋敷の本家にあたる）も見物した。こちらには人が生活していないようだが、縁側が高く、全体的に心地よいひとときであった。車窓からでも、慶州の昔ながらの民家や集落は、ノスタルジックで美しい。

午後は、まず天馬塚と大陵苑（古墳公園）に行く。慶州では、古墳は全て芝生で覆われている。その芝生の山の集団がいくつかある中で、ここが最も集中する所である。天馬塚は大陵苑の端のほうにある。内部に入れる唯一の古墳で、中は塚の構造や副葬品などを紹介する施設になっている。副葬品の一つに天馬の絵柄があったことから付いた名称というが、ロマンを掻き立てる素晴らしい命名である。校外学習らしい小学生の大集団と一緒に進んでしまったのが、少し残念だ。小学生たちは公園内をグループ行動しているようで、手には説明掲示を見てメモを取る紙を持ち、概して真面目なのだが、人数が多ければ当然騒々しい。通路を公園の奥まで歩き、ようやく喧噪から逃れた。芝生の美しい古墳の数々は、墳丘が

華麗な宮廷生活を偲ばせる遺物が多数出土している。池の畔には宮殿風の望楼が作られて、王宮ロマンの雰囲気があふれている。ここに来た人々は、ロマンに浸りつつ散歩を楽しむようだ。望楼には発掘された遺物を紹介するコーナーも設けられているが、熱心に見ていたのは私たちくらいであった。

最後に芬皇寺に寄る。七世紀、韓国のドラマにもなった善徳女王の時代に完成した古寺の一つ。国宝の石塔のみが残る。この石塔は、石を煉瓦状に積んで作ったもので、七層または九層あったのが、今は三層である。塔の四面の入り口を護る獅子の像が印象的だ。塔の脇に井戸の跡とされる所がある。また、塔から落ちたものか、煉瓦状の石が多数、往時とは異なつて狭くなつた現在の敷地の隅に、無造作に積まれていた。今後の補修や調査が待たれる。この隣には「皇龍寺」の跡もあり、こちらも広大・壮麗な寺院であったようだが、今は礎石が残るだけなので、見学は割愛した。

慶州は、ヘリコプターや熱気球などで、空の上からも見学できればもっと良いのかも知れないと、帰ってから思った。古都全体を見渡すということがしたい。それと、南山山中の石仏や、南山麓の遺跡を見られなかったのが心残りである。運転手には南山は遠いからと断られてしまったのだ。仕方がない。一度ですべて見学し尽くすのは大変だし、もっと勉強して行かなければ、と思った。

この日は十五時五十分ホテル帰着。一息入れて、別棟の

温泉に行く。広くて設備のよい健康ランドである。儒城温泉の時よりも、清潔感がある。例によって温泉気分はしないが、露天風呂もあった。手足を伸ばして入浴出来るのは、やはりうれしい。欲を言えば、ホテル宿泊者からも入浴料をとるのだから、化粧コーナーをもっと充実させたいもの。ロッカーの数、つまり収容人数に対してまだ狭いし、ドライヤーなども少ない。この夜は、温泉館の食堂で夕食を済ませた。

六、慶州博物館とKTX

四月五日、この日も晴天。慶州は、驚くほど桜並木が多いが、三日の到着以来、ほんのわずかにほころんだ木を一度見たきりで、蕾ばかりを見て終わるのがなんとも残念である。チェックアウトして、慶州国立博物館に向かう。ここには、遺跡から出た数多くの遺品が、館を分けて展示されている。庭には石像や石塔などもある。古墳から出た副葬品類、とりわけ金製品類のきらびやかさに目を奪われながら見学する。あの雁鴨池の出土品も、船を含めてまとめて展示する館がある。一通り見て回るだけで疲労を感じた。旅も六日目、疲れはすだ。このミュージアムショップは、館の規模のわりに小さい。韓国はまだミュージアムショップを充実させて販売しようという気がないらしい。それは悪いことでもないのだろうが、ショップ好きには少し寂しい。慶州紹介の図録や絵はがき、友人たちへのお土産として、遺跡や遺物の形を透かし彫りにした葉を幾つも買い込む。

博物館からは、タクシーをつかまえてKTXの駅へ向かう。バスでは慶州郊外にあるKTX駅まで時間がかかりそうであるし、重い荷物が厄介だ。着いた駅構内には飲食店などの類が少なく、ガランとしている。それでも日本食を掲げる店に入って麺類で昼食を済ませた。店内は日本風に作っているが、あちこち珍妙な点があつて、却って楽しい。ただし味はいいだけではない。隣はスターバックス風カフェ。こちらでコーヒーを飲む。韓国の物価からすれば高いカフェである。

慶州発十二時五十八分のKTXで、ソウルに向かう。慶州を通る路線はつい最近完成したばかりで、慶州―ソウル間には思ったよりも本数が少ない。この旅で四度めのKTX乗車である。韓国ではどこも駅構内が広く、基本的に欧米式で、改札口はない。ホームは広くて低い。その分、電車に乗り込む時にはステップを上がらなければならぬ。出入り口が狭いの、に、ステップがあると、大きい荷物の者には不便である。日本の鉄道は、ホームを高くして乗り降りをしやすくしたのだろう。ただし、ホームが高いと転落事故が起こるから、一長一短。改札だけでなく、車中検札も行われない。日本の場合は日本人の気質的細かさが理由なのか。新幹線内で外国人が検札に慌てる姿にはいつも同情する。ただ、車掌がくれば気安く相談できるような利点もあるから、複合的理由か。総括的に言くと、韓国の高速鉄道は、駅構内は広くさっぱりしているが、日本人には買い物に不便、というより、お弁当も

お土産も飲み物も買えないから、旅の楽しみが半減する。行き先や時刻の表示類も少し分かりづらいうと思う。駅の広さとは裏腹に、肝心のKTXの車内は狭い。フランスのTGVは特別車両は広めだそうだから、韓国も同じかもしれないが、私が乗車した車両は、座席の前後間隔や通路が狭く、日本の新幹線に慣れた者にはどうしても窮屈で圧迫感がある。特に初日に乗った車両は最も古いタイプらしく、狭さマックス、率直に言って苦痛だった。その後に乗った車両はもっと新しく、その分座り心地も少し改善しているが、それでも荷物の少ないビジネス客が乗るものという感じがぬぐえない。次の旅ではあまり利用しないだろう。十五時五分の予定に十分ほど遅れてソウル着。

このあとは買い物をして、ソウルに一泊。四月六日午前仁川を発ち、午後一時半頃、成田に帰着。

七、終わりに

中年女が二人、真面目半分、気分まかせ半分で、韓国の古都を訪問した旅の記録を閉じるにあたり、相方のYに心から感謝を述べる。彼女なしでは出来ない旅だった。国内ならば何処へでも一人旅を辞さない私も、外国はやはり言葉の心配があり、一人では心細い。かと言って一般的なツアー旅行では行きたい所を集中的に訪れることが難しい。悶々とするところに彼女が救いの手を差し伸べてくれたのだ。飛行機やホテルの予約はみな彼女がしてくれた。私たちは、働く県こそ

違ったが、かつて高校教員をしていて、Yはとても仕事のできる人である。それが、脳天気な私が四十半ばで大学院に入り研究者を目指したことが変な影響を与えてしまったのか、仕事を棄てて大学院生になり、修士号を得た後はフリーのライターをしている。Yちゃん、本当に本当にありがとう。拙文が韓国個人旅行を志す人の参考になれば幸甚。

【参考文献】

☆歴史関係

井上 秀雄『古代朝鮮』（講談社学術文庫 二〇〇四年）

礪波 護、武田 幸男『世界の歴史6 隋唐帝国と古代朝鮮』（中央公論社 一九九七年）

上垣外 憲一『倭人と韓人』（講談社学術文庫 二〇〇三年）

金 勇男『慶州 二千年の歴史が生きている新羅の古都』（宇進文化社 二〇〇八年）

☆ガイドブック

『新個人旅行 韓国』（昭文社 二〇〇九年）

『地球の歩き方（08・09）韓国』（ダイヤモンド社 二〇〇八年）

☆おまけ

熊田 洋子『母性教育のゆがみ 日韓比較調査をもとに』（青簡社 二〇一〇年）

同 『母乳指導の誤算』（同 二〇一一年）